

Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.27 No.3 March 2026

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

3

CONTENTS

- 巻頭言
神話と進化論的視点の誘惑
／井上 昭洋 1
- 天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」
(22)
ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相①
／加藤 匡人 2
- 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (30)
先住民の視点から災害を見る
／山西 弘朗 3
- 教内の福祉の歴史 (2)
歴史および歴史学について
／松原 浩一郎 4
- 天理参考館から (最終回)
天理参考館第 100 回企画展「教祖 140 年祭記念 幕末明治の暮らし」②
／幡鎌 真理 5
- 日本占領期の香港—植民地研究の視点から— (8)
ブラック・クリスマス：日本軍による香港占領
／山本 和行 6
- 2025 年度公開教学講座：「元の理」の学術的研究とその新しい展開を求めて (9)
第 9 講：「元の理」と異文化理解
／森 洋明 7
- おやさと研究所ニュース 8
2025 年度おやさと研究所 特別講座「教学と現代」のご案内

巻頭言

神話と進化論的視点の誘惑

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

ハワイの創世神話『クムリポ』についてこの叙事詩は進化論に比肩しうるハワイ版の進化論的創世神話として紹介されることがある。さらに、ダーウィン以前に進化論的世界観をハワイ人は持っていた、あるいは進化論が神話の先見性を明らかにした、といった解釈がなされたりする。創世神話も進化論も人間の誕生から現在に至るまでの物語であるという点で似通っている。この類似が、両者を重ね合わせる読みを誘う。しかし、それで良いのだろうか。

『クムリポ』が語る生成の物語を、進化論のみならず現代の生命科学の知識と重ね合わせたくなる気持ちは、決して不自然なものではない。そこには、遠い昔に編まれた神話が、今日の私たちの科学的知見にどこかで通じているのではないかという、素朴な期待がある。しかし、その期待が強くなりすぎるとき、私たちは神話を「科学を先取りしたもの」として読んでしまう危うさを抱え込むことになる。神話の語りを現代科学の言語に翻訳できたと感じた瞬間、神話そのものが持つ語りの豊かさを枯れさせてしまうのではないだろうか。

『クムリポ』は、進化のプロセスを説明する理論ではなく、世界がどのような秩序のもとで現れてきたのかを語る系譜の物語である。そこに進化論的な響きを読み取ることはできても、それをもって神話の「正しさ」や「先見性」を保証しようとするならば、その読みは神話を科学に従属させることになる。創世神話を進化論や生命科学の知識で読み替え、「だからこの神話はすごい」と言いたくなるとき、私たちは神話を称賛しているつもりでも、実は科学の権威に寄りかかっている。問題は、神話を進化論や生命科学によって解釈することにあるのではない。それが比喩的な「見立て」であるという自覚を欠いたまま、科学との類似性をもって神話の正しさを裏付けようとする態度にあるのではないか。

ハワイの創世神話『クムリポ』について 2025 年 12 月号の巻頭言で紹介した。この壮大な叙事詩は、前半の夜の時代と後半の昼の時代に分かれる。なかでも前半の夜の時代では、宇宙の誕生から海生生物の出現に始まる生物の移り変わりまでが、海と陸の生物が対をなす形で語られる。ポリプ(珊瑚虫)にはじまり、ウニと海藻が生まれる。イルカを含む泳ぐ生き物とそれに対応する植物、さらに海鳥と陸鳥そして芋虫や蝶も誕生する。続いて這う生き物(海亀、エビ、トカゲ)とそれに対応する植物が生まれ、タロイモ、さらにノミ、ネズミ、犬、コウモリと続く。海と陸の両方で、原始的な生物から人間の生活圏に住まう生き物へと、生物の系譜が語られる。こうして後半の昼の時代、神々と王族と人間の物語へと紡がれていく。

海底火山が隆起して火山島となり、海鳥が運んできた植物の種子が芽吹き、島の周囲に珊瑚礁が形成される。堡礁(バリア・リーフ)と陸地の間に礁湖(ラグーン)ができ、その環境に適した生物が生息するようになる。ハワイ人の祖先はそのような自然環境の成り立ちを熟知していたはずで、『クムリポ』の夜の時代を語る叙事詩に西洋の生物学とは異なる豊かな生物発生論的な民俗知識を認めることができる。それは西洋の形態学や分類学とは異なる体系を持ったタイプロジー(類型論)であり、海の生物と陸の生物を、動物と植物をその形状や性質から隠喩的に関連付ける独自の世界観を持つ。

一方、原始的な海生生物から魚類、鳥類、哺乳類へと展開する生物出現の描写は、共通の祖先から枝分かれするように生物が進化してきたと説くダーウィンの「生命の樹」の概念を彷彿とさせる。19 世紀のドイツ人人類学者アルフレッド・バステリアンは、ダーウィン進化論との類似性に注目し、『クムリポ』をヨーロッパに伝えた。現在も、